（第５回日本土木史研究発表会論文集　1985年６月）

河北潟干拓と銭屋五兵衛

正会員　鳥取大学　○岡田憲夫
正会員　北電産業㈱　稲松敏夫（技術士）

Reclamation of Lake Kahoku and Gohei Zeniya

by Norio Okada
Toshio Inamatsu

概　　要

河北潟は、石川県内灘町の日本海海岸の近く、内灘砂丘をはさんで2,248haの大きな湖沼であるが、前田藩主の奨励によって、延宝６年(1673年）第１回の埋立てが行われてから、180年後嘉永２年(1849年）７回目に銭屋五兵衛の埋立てが着工された。五兵衛の埋立計画は周囲27km、面積23km²(2,300町歩）、50,000石増収を目的とした20年計画の壮大なものであったが、着工後２年目で、所謂魚の中毒事件で漁民の告訴によって、銭屋五兵衛一家が捕えられ、埋立工事も中断した。その後数回、沿岸農家から埋立申請が出されたが、着工に至らなかった。

終戦後、昭和28年頃より内灘砂丘米軍試射場反対運動が起り、その後昭和38年農林省北陸農政局により埋立方式でなく、干拓方式によって、干陸工事が行われ、昭和50年干陸式を行い、現在 2,248haの潟面積の中60％1,358haが干拓され、その８割が畑地、２割が酪農地として20余戸が酪農家として入植している。

本稿は、藩政時代特に銭屋五兵衛時代の埋立工事と、現在施工された干拓工事の技術上の相異点と、時代的背景、並びに銭屋五兵衛の埋立工事及び魚中毒事件の背景についてまとめた。

尚、60年５月21日完工式が行われる。第１回の埋立工事より実に312年目にあたる。

（延宝 ～ 昭和期　　干拓工事　変遷と人物）

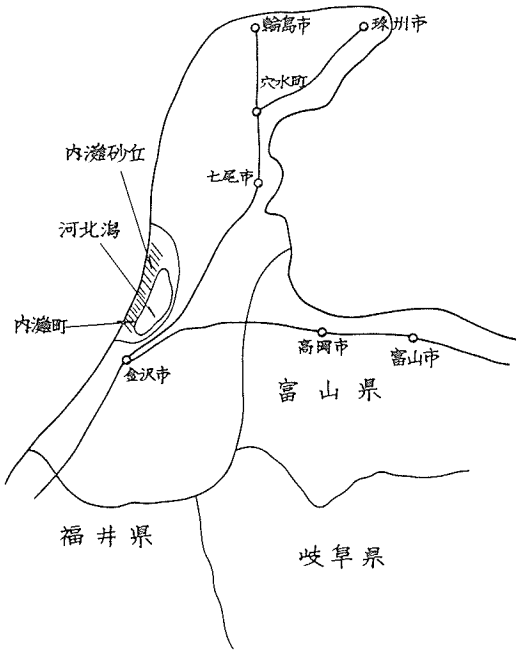
１．藩政時代の埋立工事

前田藩主の奨励によって、延宝６年（1673年）第１回の埋立工事が行われてから、第７回目の銭屋五兵衛の埋立工事まで、すべて沿岸より土砂を盛り立てる所謂埋立工法による工事で、既に第１回より第６回までの埋立工事によって造成された水田は、稲作に利用されて米の増産に有効に利用されて沿岸農民の生活の糧をうるほしていた。

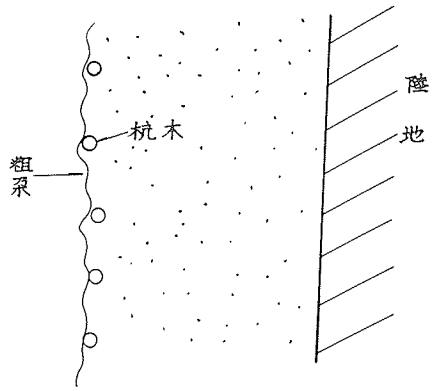
銭屋五兵衛も前田藩の御用商人として、後に述べる理由から、河北潟の埋立工事を計画したが、藩政時代の埋立工事は第３図の様な工法で陸地から潟に向って土砂を盛り出す埋立工法で、その為には、埋立区画を区切って小規模な埋立工事のつみ重ねであったが、銭屋五兵衛は相当大規模な埋立工事を計画してその第一歩の工事に着工したのである。

藩政時代の埋立工事概要

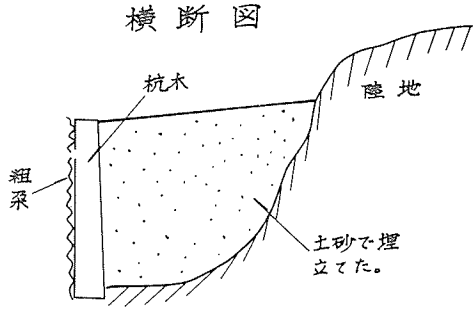
第1図 河北潟付近図



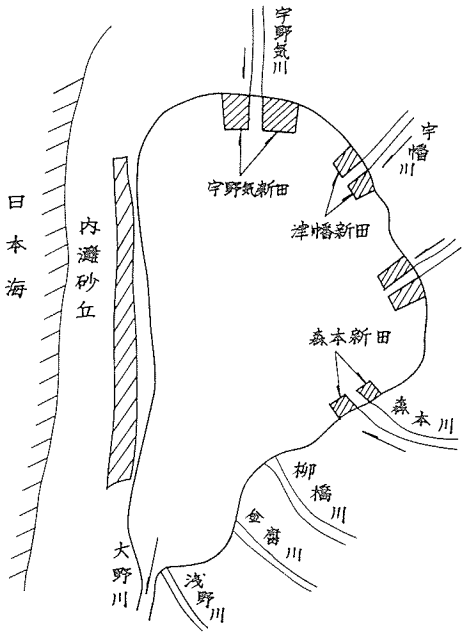
第3図 平面図



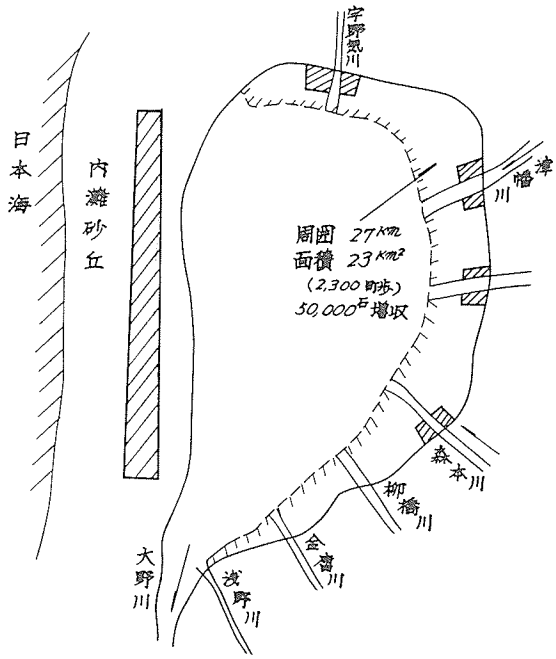
横断図



第2図 河北潟埋立図(藩政時代)



第4図 銭屋五兵衛の埋立計画



2．銭屋五兵衛の埋立工事の背景

銭屋五兵衛は安永二年(1773年)金沢の近郊の港町宮腰(現在金沢市金石町)に生まれた。
銭屋は屋号で、代々この家が両替商をしていたことからついたといわれる。
五兵衛が39才の文化８年(1811年)質流れの 120石船を手に入れて、これを３人乗りの運送船に改造し、米の廻送を始めたところ大変首尾よい結果を得た。これを機縁にして、海運業に乗り出し、天保年間(1830－44年)に入ってからは千石積み以上の北前船を操る大回船問屋に成長していくのである。
天保11年藩政を掌握した奥村栄実に重用され、御用商人として藩の財政を助けると共に、船の御手船裁許を仰せつかった。
かくして、加賀百万石の威光と信用を得た五兵衛は、海の百万石の商人に飛躍していく。
所が、奥村栄実が天保14年死去するや、まもなく長連弘が、いわゆる黒羽織党を引き連れて政権を握る。
これを境に五兵衛の商運にも翳りが見え始める。
この時に五兵衛が河北潟埋立て開墾を藩に出願した。時に五兵衛77才で嘉永２年(1849年)のことであった。

3．銭屋五兵衛埋立ての動機

(1) 動機としては諸説であるが、特に奥村栄実の没後、権力を握った黒羽織党から次第に疎んぜられて藩の後楯がなくなり、商売が難しくなったこと。
(2) 危険分散のため、財産の一部を安定した土地への投下資本に換えておきたいと考えたこと。
(3) 当時は原則として商人が田畑を有することは禁止されていたが、開墾地に限ってそれが許されていたという事情もある。
(4) 三男要蔵を大開発地主に仕立てて功績を上げさせ、ゆくゆくは十村(とそん)列（大庄屋に相当するもの）にしたいとする親心があった。とする見方も有力である。

4．河北潟埋立てと魚中毒事件

埋立て工事は主として潟に流れ込む中小河川を区割りにして計画されたらしい。すなわち、まず北隈の宇ノ気川筋から、津幡川筋にかけての工区が着手された。次いで津幡川から森本川筋にかけての工区ならびに森本川から浅野川筋にかけての工区といった具合に工事が始まった模様である。
埋立て工法は、第３図の様であったが、後に土木に明るい者の助言を入れて、石灰を投入して土砂の締め固めを促進する方法を採用した。これが思わぬ悲劇を引き起こすことになろうとは、この頃の五兵衛や要蔵は知るすべもない。
又、五兵衛、要蔵親子は膨大な支出を少しでも切り詰めるべく、沿岸の村人達に任せず、労賃が安く、またこの種の労働に慣れている労務者を能登の宝立鉱山から調達した。これもまた周辺の漁民の心証を害し、五兵衛にわざわいする一因となる暗夜に紛れて杭を抜き粗朶を取り去り土砂を掘り起こすという漁民の妨害が行われた。
嘉永五年七月、潟の魚類が続々死んで浮き上がった。さらにその死魚を食べて中毒死する者が現われ、ただでも埋立工事に反対してきた漁民は、五兵衛が工事の過程で水中に毒物を投中したためであると断じた。土砂を固めるのに用いた石灰などが毒物に擬せられた。

5．銭屋五兵衛一家の処分

石灰をこのように土砂の締め固めに利用することは、現代の土壌改良法の一つに通ずるものであり、また石灰自体が湖の広域にわたる生態系の破壊に直接つながりえないことは、現代科学の教えるところである。
事実、事態の急変にこれをうちすててておけなくなった藩当局によって、現地に派遣された藩医黒川良安は結局シロに近い結論を提出した。
その真の原因は何であったかは、今となっては、憶測の域を出ないが、いわゆる赤潮現象とみる見方が有力である。また折から食中毒の季節であったことも、事態を複雑にしたであろう。
長連弘が立宰する藩当局は、はじめ形式的に五兵衛一派を取り調べるかに見えたが、次第に詮議は苛酷になり、事件の真相もはっきりしないまま、五兵衛は八十才の高齢で獄舎の人となり、まもな

く病が悪化して牢中で憤死する。嘉永五年十一月二十一日のことであった。裁判の結果、翌六年十二月、要蔵と手代市兵衛は磔、喜太郎と佐八郎は永牢、その他連累の処罰者数十人に及んだ。
勿論、銭屋の家財は没収、家名は断絶となった。

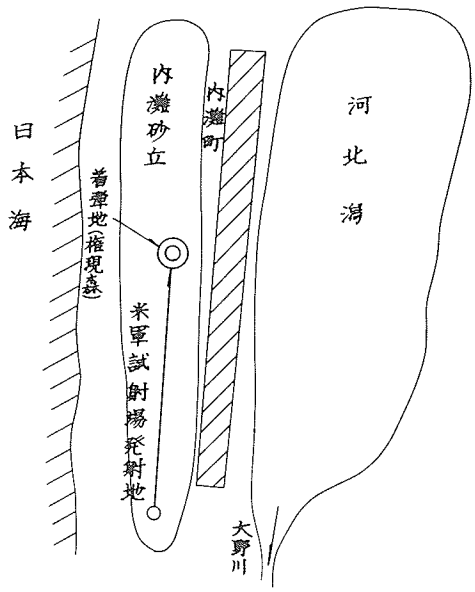
6．悲劇の原因

原因の一つは、五兵衛と提携関係にあった奥村政権ではなく、その政敵黒羽織党であったという点である。
さらに裁判の進行する間に藩を取りまく、環境が変化した（と彼らが思いこんだ）ことも関係ありそうである。
幕府が五兵衛に海外密貿易の嫌疑をかけ始めたらしいこと。
また、会津藩の森林の買い占めが幕府に知れて、幕僚の心証を害したらしいこと、それらが長一派の耳に入って、五兵衛一族を早めに処分しておかねばならないという強迫観念にとりつかれたためと推測されている。
しかし、そもそもの発端は、直接工事の影響を受ける漁民の了解が得られなかった点であろう。
それ故に五兵衛を非難することは容易である。
しかし、明治以降いくたびか、この潟の埋立てを企画する者が現われたが、いつも漁民の反対にあって頓挫した。
この事実は、いかにこの種の試みがその公共性にもかかわらず漁民にとっは受け入れ難いものに映ったかを如実に物語っている。
ここに土木工事のもつ本質の一端がある。
そしてこの点で、土木家としての五兵衛の苦悩はまさに現代に通じるのである。
国土を刻み、これを改変するための自然を相手にした営みは土木の一面であっても、決してすべてではない。否むしろ、人々の心のひだに触れ、その織りなす社会の仕組みと底流にその成否を掛けねばならないという面こそ、土木のもつ業であり、他の工学と異なる醍醐味でもある。

6．内灘試射場問題

昭和28年内灘砂丘に於て米軍試射場反対問題が起った。着弾地の権現森に、漁民が座り込みを行い、し烈な反対運動が展開され政治問題化し、その解決策に政府は苦慮した。

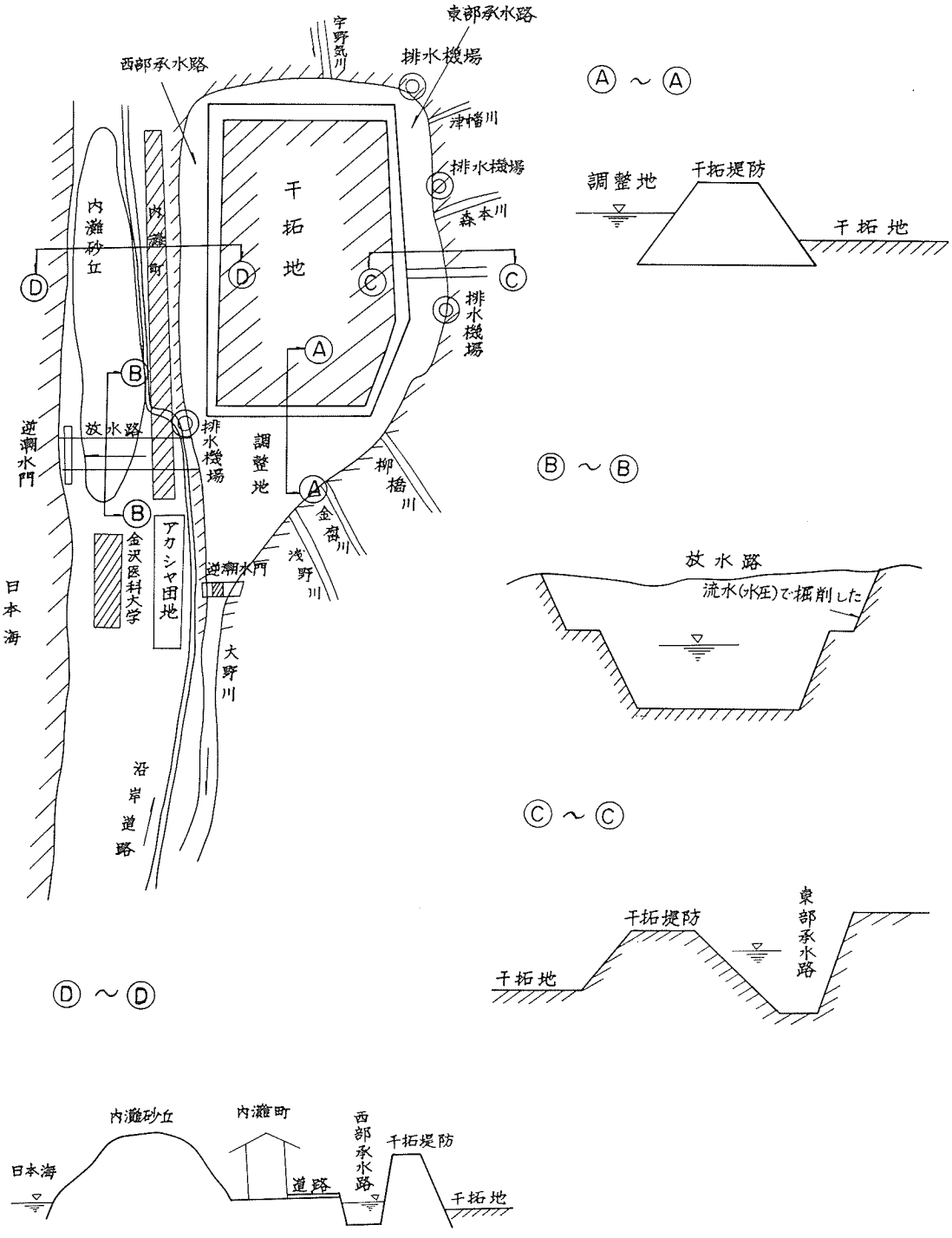
第5図　試射場位置図



7．農林省の河北潟干拓計画

昭和38年農林省が河北潟干拓計画を発表し、38年起工式を行った。
2,248haの河北潟の面積の中、その60％ 1,358haを干拓し、米作の大農場地帯として、オランダの干拓計画を参考にした八郎潟につづいて、日本で二番目の大干拓工事に着工した。50年干陸式を行ったが、当時米作過剰時代であった為、８割畑作２割酪農地として現在20余戸入植している。
昭和60年５月21日完工式を行い、22年に亘る河北潟干拓工事は終止符を打つ。
実に前田藩主の奨励によって第１回埋立工事を行った延宝６年（1673年）より、昭和60年の完工式（1985年）まで実に312年の長い歴史の過程の中、銭屋五兵衛は嘉永五年（1852年）で第１回の埋立工事より180年、現在迄133年 略々312年の河北潟干拓工事の歴史のほぼ中間にあたる。

第６図　河北潟干拓地


東部承水路
宇野気川
排水機場
西部承水路
津幡川
排水機場
森本川
干拓地
内灘砂丘
内灘町
排水機場
放水路
逆潮水門
排水機場
調整地
柳橋川
金腐川
浅野川
金沢医科大学
アカシヤ団地
逆潮水門
日本海
大野川
沿岸道路
Ⓐ～Ⓐ
調整地
干拓堤防
干拓地
Ⓑ～Ⓑ
放水路
流水(水圧)で掘削した
Ⓒ～Ⓒ
干拓堤防
東部承水路
干拓地
Ⓓ～Ⓓ
内灘砂丘
内灘町
西部承水路
干拓堤防
日本海
道路
干拓地

8．干拓工事の特殊性

干拓工事の特色は、

(1) 干拓堤防の基礎は60ｍの深さまで軟弱地盤で、その補強工事に苦労した。

(2) 日本海への放水路は、砂質土砂(高さ15ｍ)を流水掘削によって浚渫船に乗せ干拓堤防の盛土に利用した事と、近距離はパイプ輸送で干拓堤防の盛土に利用した。

(3) 連絡道路橋梁基礎の沈下補強対策に苦労した。

(4) 畑作の為の塩害等の調査により、作物の種別を試験の結果選定した。

(5) 酪農用、耕作用のサイロ、建物の基礎の軟弱地盤強化に苦労した。

9．河北潟干拓と金沢港等の開発関連

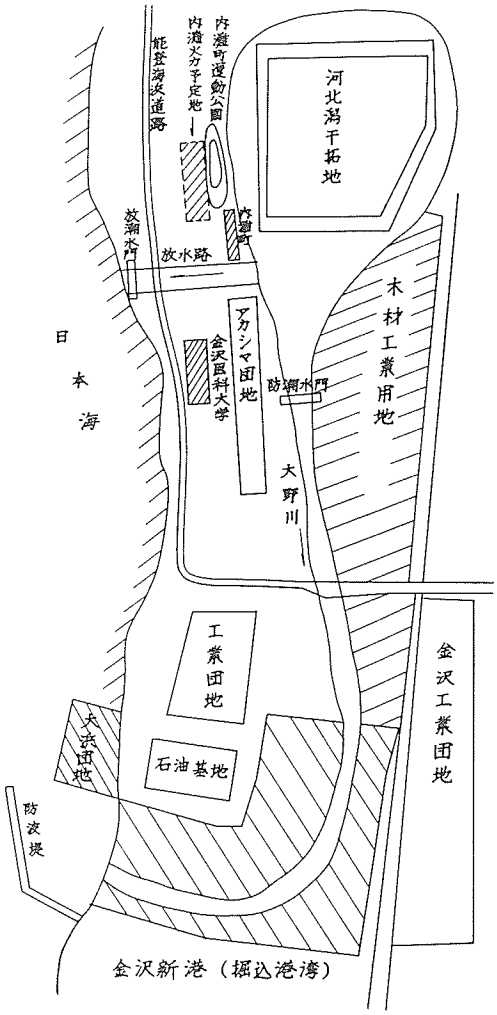
河北潟は従前、干拓前は、洪水の調節地となり、大野川を通じて日本海に注いでいたが、干拓の結果、人工放水路を作ると共に、大野川を通じて日本海に注ぐ。(調整地が小さくなった為)

更に関連開発として、金沢新港と河北潟干拓地に至る大野川沿岸の工業団地、木材団地、河北潟の調整地を流木貯木場計画、更に内灘砂丘に能登海浜道路がつくられ、内灘砂丘地に運動公園等がつくられている。

昭和46年頃内灘砂丘に北陸電力の火力発電所計画もあったが中止となった。

現在は、金沢市近郊の住宅地帯となり、内灘町は人口25,000人位となっている。

第７図　河北潟金沢新港周辺図



10．現地を巡って

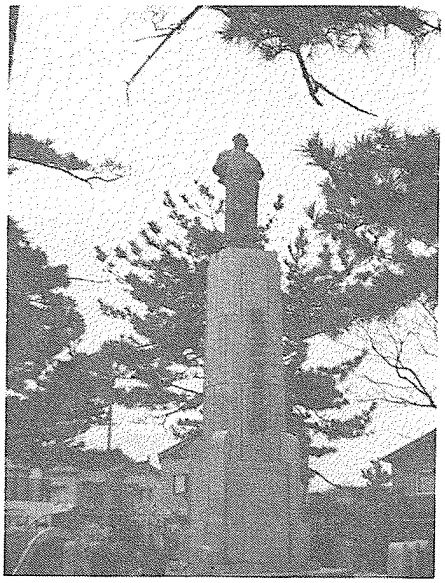
筆者らは59年４月末金沢市金石の銭五遺品館を尋ね、館長清水勇伯氏(銭屋五兵衛十一代目当主)より銭屋五兵衛についての河北潟埋立事件を中心に話を伺い、金石の海浜で日本海を臨んで立つ銭屋五兵衛像、銭屋五兵衛の墓を訪ね、ひきつづき金沢新港をみて河北潟干拓地へと向った。

大野河沿いに内灘町の住宅地を通り河北潟調整地の右岸から左手に金沢医科大学の白亜の建物を見ながら、放水路に架けられた橋を渡りざま、左手に続くドライブウェイを駆け上がると、そこは北西にあの試射場撤去闘争で揺れた内灘砂丘が、

また車から南の方向にかけて河北潟が眺望できる内灘総合公園がある。
湖の北側の３分の２以上は既に干拓されて陸地と化し、その周囲を堤防が、さらにその外側をはち巻き状に水路がめぐらされている。
干拓地の南側は、堤防を隔てて往時の潟の一部が残っている。
さらにその西側の眼下には、そう、先刻渡ってきた人工の放水路が、砂丘を切り込む形で潟と日本海を結んでいる。
潮位差による海水の遡上を防ぐための防潮門や干拓地の排水のためのポンプ場がそこかしこに見かけられる。
五兵衛の手掛けた場所はあそこと、あそこか。
往時の工事の模様がまぶたに重なる。
そして彼よりも以前のまたその後に続いた数多くの土木家達の姿が。
彼等がみたであろう壮大で雄壮な自然と人間のロマンに圧倒される思いでその場を離れた筆者は、自身の中で銭屋五兵衛の像が、新しい光を得て心なしか大きく育ちつつあるのを感じていた。
尚、作家井上靖が旧制第四高等学校時代に、内灘砂丘に寝て夜の星を眺めた事がしばしばあったとして、内灘総合公園に井上靖の碑が立っている。

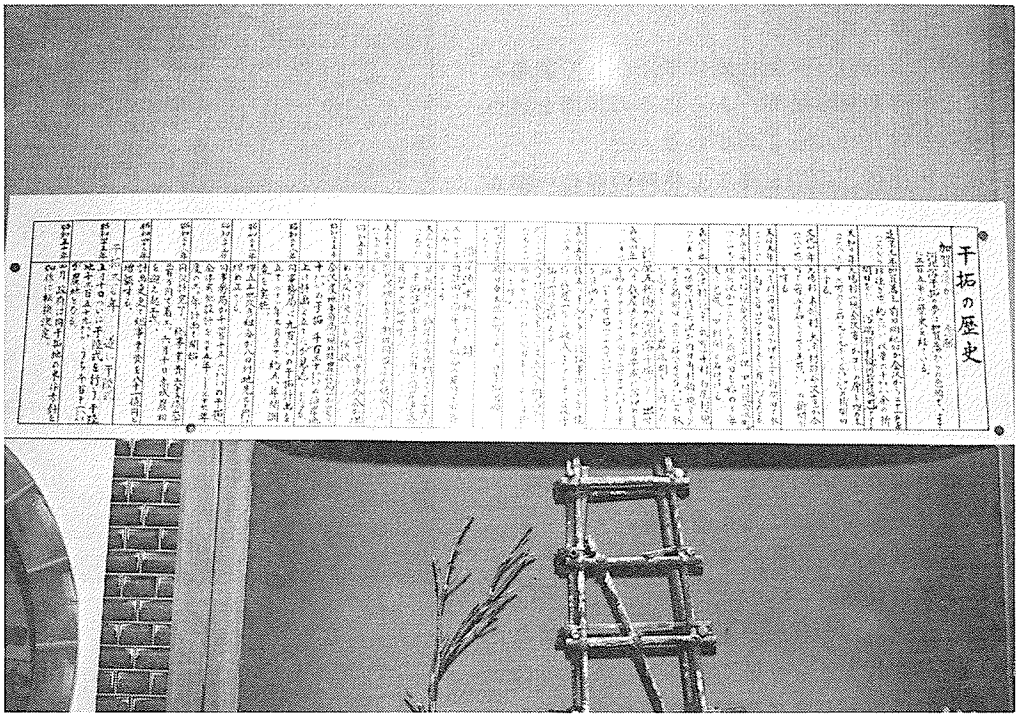
“日本海美し、内灘の砂丘美し、
　波の音を聞きて、生きる人の心美し　井上靖”

前田藩政時代の河北潟埋立てに始まり、銭屋五兵衛の埋立てを経て、現在の河北潟干拓工事完工式を迎えた312年の歳月の経過と、 内灘試射場撤去闘争、金沢火力反対闘争と井上靖のロマンと、総合公園と金沢医科大学と能登海浜道路の白い一直線とを一望に眺めて、筆者は土木工事の運命とロマンと悲しさを胸にだきしめて帰路金沢へ向った。


銭屋五兵衛像

銭屋五兵衛句碑

（参考文献）
1．銭屋五兵衛、岡田憲夫“歴史と旅”
　59年7月 列島の改造者達
2．鏑木勢岐“銭屋五兵衛の研究”
3．銭五遺品館長 清水勇伯（銭屋五兵衛十一代目当主）談



河北潟干拓の歴史（銭五遺品館蔵）

翁は安永二年（一七七三年）加賀国宮腰今の金石町に生まれました。姓は清水、幼名を茂助と稱し家代々貿易業を営んだので銭屋と号しました。十七才で並に金銭両替業を営んだので銭屋と号しました。十七才で家業を相続し、同時に宮腰下通町組合頭を命ぜられ、その後異服、古着商を開業していました。三十九才の時古船（二〇石積）を使用し、海運業を始めましたがこれから海運、貿易業として海内に雄飛することになります。嘉永二年（八四九年）二月河北潟干拓を出願しついで同四年要蔵（銭五郎）、栗崎の木谷藤右衛門、島崎徳兵衛の連署で河北潟の埋立を出願し八月許可されて工事に着手しました。翌年河北潟の魚類死滅の事件があり、このため九月五兵衛をはじめ工事関係者は収容され嘉永五年（一八五二年）十一月二十一日遂に翁は獄中で死去、享年八十才でありました。当時幕府は鎖國制策をとっていましたが開國の気運は高まりつゝありました。我が國貿易の先覚者として銭屋五兵衛は既にこのことを洞察しており洋学者、本多利明、大野弁吉などから貿易、天文暦などの新知識を得ております。翁の事業は海運、金融、貿易、殖産、地域開発など多彩なものがありますが商傑としての翁は半面人間的魅力に富んだ教養の高い文化人であることはその筆跡や遺品にもうかがわれ、今尚多くの人々に親しまれている訳であります。翁逝いて既に百三十年を経た今日河北潟干拓事業、金沢港の開港など諸計画が進んでいる時あらためて翁の卓見と業跡を再認識し人間味豊かな生涯をしのぶことも意義あるものと考え銭五遺品館として筆足致しました。

銭屋五兵衛の一生（銭五遺品館蔵）